

世紀を超えて —筑波大学と「内なる国際化」—

小林剛史
心理学系助手

改革の難しさ

今回の原稿を執筆するにあたり、図らずも様々な観点から筑波大学が直面する喫緊の課題に改めて思いをめぐらす機会を得たわけであるが、その一環として手に取ったこれまでの筑波フォーラムを一読し驚いた点があった。目を通した文章の多くが本学の内包する諸課題のポイントを的確に指摘しており、およそ私が思い当たる事柄はほぼ網羅されていたからである。

しかし、同時に気付いたのは、それらが現状認識の域を越えて改革に到達することの難しさであった。大学経営を取り巻く環境が厳しさを増す中、当然のことながら本学もその渦中のただ中にあることは論を待たない。21世紀に本学が名誉ある地位を確保するために抜本的な改革を成し遂げる必要性は、本学関係者であれば誰もが痛感していることであろう。一方で、具体的な課題解決の方策には、

潜在的抵抗勢力とも言うべき反作用が伴うこともまた事実であり、大学改革の難しさを改めて認識させられる。

我が国は伝統的に、過去営々と構築されてきた体系の上に時代毎の成果を蓄積し、良かれ悪しかれその継続性を重視してきた長い歴史を有する。よって、パラダイムの大きな変換を伴う改革に対し、日本人は内在的に不安を生じやすい性質がある。本学のみならず我が国において「改革」を妨げる主体は、実は既得権益の喪失層それ自体ではなく、継続性の断絶に伴うパラダイム変換がもたらす不確実性に対し人々が有する漠然とした不安の総体ではないかと感じることもある。

しかし、「改革」とは、継続性を断絶させたいがために人々の不安感を煽ることがその目的なのではない。パラダイム変換が要請する次世代に相応しい社会の仕組みへの転換や、変化やリスクを進んで受容する意識の向上など、社会全体の思

想の熟度が高まる大きな目的であろう。言い替えば、人々が時代の要請に対応できず座して死を待つのではなく、精神的余裕を保持しつつ時代に則した高度な智慧を生み出していくインフラ提供こそ「改革」が真に目指す峰と書いてよい。であるならば、本学の改革が如何に困難でありその具体的な処方箋提示に難渋しようとも、敢えてそのプロセスに挑むことに如くはない。

さて、前置きが長くなったが、本稿を進めていくに当たり、私の学群時代の留学経験から気付いたことに的を絞り、かなり主観的な観点から議論を進めることとしたい。何故なら、この留学経験こそが私の中のパラダイム変換をもたらした最初の大きな機会だったからである。

留学経験から

私は第二学群人間学類3年次にニューヨーク州立大学で1年間を過ごす機会を与えられた。わずか10年前ではあるが、現在のように海外留学が日常的になる一歩手前の時代である。事前準備には相当の神経を使ったが、当時はそれが当然のことと理解していた。しかし、いざ渡米すると受入側のシステムは驚くほど整備されており、逆に筑波大学における出国前の煩雑な事務手続や経済支援に関する

制度的課題が浮き彫りになった記憶がある。

例えば、これは筑波大学に限ったことではないが、学生は筑波大学での身分を「休学」にするか、「留学」にするか選択しなければならないが、「留学」にした場合は大学に籍を置き続けるために留学中も授業料を払い続けなければならない。また、年度の途中で留学するため、受講資格を留保するために全講座の担当教授に個別に承諾をとってまわる必要がある。また、私は幸い国費による留学が出来たが、予算の関係上その支給は3ヶ月毎に一度という極度に柔軟性に欠けたシステムになっており、当該学期の期初に学費・食費・住居費など一括金額納付が前提となっている米国の制度とも調和していなかった。その結果、国費が支給されているにもかかわらず、私はやむなく一時的に親の援助を受けることとなった。

留学制度がある一方で、いまだにかかるといえる硬直的なシステムが厳然と存在することに私は大いなる疑問を禁じ得ない。優秀でも経済的に恵まれない学生の留学生活は非常に困難となり、国費支給資格を得た学生でも、何らかの金銭的支援なくしてはその立ち上げすらままならないというケースは現在でも決して珍しくな

い。現地で経済的問題を抱える不安の中で
の学究生活は過度な精神的負担を留
学生に強いることとなり、留学目的の達成
にも大きな支障が生じよう。

私が留学したニューヨーク州立大学に
も筑波大学と同じく「留学生センター」
なるものがあつた。留学生は渡米後暫く
は右も左もわからないためそこによく出
入りし交流するのであるが、間もなく現
地学生に速やかに馴染んで自然とセン
ターから足が遠のくこととなる。セン
ターでは各種手続が一元化されており日
本で感じたような煩わしさが殆ど無かつ
たばかりか、あくまで異国の地での学究
生活や人間関係に慣れるまでの一時支援
的な場と位置付けられていることが印象
的であつた。現に私も最初の1ヶ月を経
過してからは殆ど足を運ぶことがなかつ
た。無論、これは多民族国家アメリカの
懐の深さを反映しており、継続的に交流
を促す積極的なシステムをあえて導入す
る必要はないという国情もあろう。しか
し、結果的にセンター内に留学生が滞留
することのないよう受入体制が整備され、
スムーズに通常の学究生活に移行す
べくあくまで補完的ステップとして効
率的に運営されていた事実は特筆に値す
る。

筑波大学は他大学との比較において相

対的に国際化に努力していることに異論
はないだろう。しかし、留学生と日本人
筑波大生の交流が自然な形で積極的に
行われているとは言い難く、依然として改
善の余地は大きい。本学を取り巻く環境
を鑑みれば、留学生の受入に際しては、
日本人学生と留学生が自然な形でさらに
積極的に交流するようなシステムがビル
トインされている仕組みを独自に構築す
ることが必要である。例えば「留学生セ
ンター」の仕組みを再構築することは不
可欠であるし、これにより本学への留
学生と日本人学生とが共に手を携えて自然
な形で共に学究生活を送ることができ
れば、實質的に世界に開かれた高等研究・
教育機関として本学のレーゾンデートル
はより確固としたものにならう。

語学力の向上のために

留学をして強く感じたことがもう一点
ある。それは、これほど高度に教育が発
達した日本において、中学校以来約10年
に亘り受けた英語教育が実地では殆ど役
に立たないという厳しい現実であつた。
筑波大学では1年次と2年次に基礎的な
外国語を学び、3年次以降はより特殊性
の高い言語を学ぶ。このカリキュラムは
多少の相違はあれ他大学でもほぼ同じで
あろう。筑波大学での外国語教育は他大

学に比し比較優位がないわけではない。多くの外国人教師を配して体系的な外国語教育が行われており、かなり積極的に語学力が修練される環境が整備されている。しかし、在学中に語学力の飛躍的向上が期待し得るか、と言えばノーと答えざるを得ない。

私は、個人的に学群生に院試験のための英語を教え、また以前は外国人の友人を誘って研究室で英会話クラスを設けていたこともある。その経験から言えば、少なくとも意思伝達の手段としての筑波大学生の平均的な英語能力が向上著しいとはとても言えないというのが実態である。なぜ長きに亘り学び、立派なシステムを導入しても英語能力の飛躍的な向上を成し得ないのだろうか。

答えは実は極めて単純なところにある。我が国では英語が不可欠なコミュニケーション手段として存在しないからである。私は、留学中にプエルトリコ出身のある学生が数ヶ月も経たないうちに驚異的なスピードで英語能力を向上させたことが強く印象として残っている。初対面の際、彼女の英語力はお世辞にも高いとは言い難かったが、1年間の留学を互いに終える頃には、日常的なコミュニケーションは勿論のこと、かなり突っ込んだ議論まで難くこなせるようになって

ていた。これは、英語を使わないとコミュニケーションさえ一切できないという厳しい環境の中で、英語が不可欠なツールとして存在したからに他ならない。英語がツールとして扱われず、単なる「授業科目」として存在している限り、外国語教育の現状を打破することは困難であろう。言語とは、それ自体が習得する対象なのではなく、有効活用を随時心掛けないと意思伝達さえできない命綱であるという事実を我々は再認識する必要がある。その認識のもとで、本学は新たな外国語教育の体系を再構築すべきであろう。

筑波大学に期待する国際人の養成

英語の第2公用語化論が叫ばれるほど、日本人の外国語コンプレックス—特に英語コンプレックス—はいまだ根強いものがある。一方で、こうした風潮に反発するかの如く、日本で一般的に通じる外国語など実際はないのであるから、外国語の習得自体持て囃されている現状はおかしい、外国語教育にそれほど重きを置く必要があるのか、という意見も散見される。

私は、外国語習得そのものの是非を論ずること自体が、深い洞察力をもってこそ成し得る我が国固有の文化や思想の体

系的な理解を如何に妨げているかの証左となっている点を強調したい。他文化との接触・理解は、逆説的に自国文化のアイデンティティの再確認を促し、より相対化された興味を深耕させていくことに繋がっていく。実際に、留学を通じて日本人としてのアイデンティティを再認識する学生は多い。すなわち、外国語や外国文化を学ぶ過程で、当該文化圏と自国文化圏の相違を明確に認識し、強い関心をもって研究することにより、多角的な視野で物事を捉えていく人材が育成されていく。

諸外国の情報は今では世界中どこにいても瞬時に手に入るが、マスメディアを通じた情報が如何に偏った主観に基づくものか、留学をすると非常に良くわかる。こうした第三者が介在する情報の多くは各国の特殊事情や人々の考え方の差異を殊更に強調しており、我々はその差異を多大な興味から、時には羨望の、時には侮蔑の眼差しをもって知ろうとする。しかし、実際にその国に行き、その国の人に会い、その国の人の言葉を使って拙くてもコミュニケーションを図ろうとすれば、試行錯誤を経ながらも、国や社会のあり方や人間が作り出す思想というものが実は如何に似通った部分が多いかという感動的な事実を目の当たりにす

ることができる。人や国や文化の差異をいたずらに喧伝するのではなく、逆に共通点を共に探り共に生きていくことの重要性が、土に水が込み込んでいくように直感的に理解できるようになる。私は、日本人がその歴史的特性から異質なものに対する排他的特性を有するがために、瞬時に世界中から情報が入り乱れる現代だからこそその特性が増幅される傾向を憂慮している。かかる傾向を回避するためにも、相対的・客観的視野の醸成に繋がるコミュニケーションツールとしての外国語習得は、真に国際化を標榜すべき筑波大学の学生にとって不可欠であることを改めて強く確認しておきたい。

実は、留学のように散えて他国に出ていく必要は必ずしも無い。既述の通り、受入体制の整備と外国語を習得する目的の根本さえ理解すれば、外国語教育の素地がある筑波大学の中での人材育成は十分対応可能だ。また、源氏物語などの古典やトヨタのカンバン方式などにとどまらず、例えば本学が誇る次世代の研究分野など我が国が世界に打ち出していくべき潜在的分野はまだ多い。日本人の持つ優れた思想・文化・技術は、やはり日本人自身が外国語を介して広く紹介していくことにこそ意味がある。筑波大学は、多くの留学生を受け入れた上で学内

の活性化を促すことにより真に内なる国際化の熟度を高め、今後益々必要とされるであろう日本人としてのアイデンティティを世界に発信し得る人材を育成する土壌がある。現状に甘んずることなくさらにこの強みを發揮していくことが本学には求められている。

社会に要請される本学の機能

我が国では従来、社会に出るまでの通過儀礼的な要素が大学に求められている側面が強かったが、やはりこうした考え方には大きな歪みがあると言わざるを得ない。大学は学問追求の最先端を切り開くべき存在としての役割が期待されてきた。本学の高等教育・研究機関としての設立趣旨を鑑みれば、やはり学問真理の探求の先端に存在すべき機関をベースとしてその位置付けを再定義する必要がある。

ここで留意しなければならないのは、時代の不確実性が増していく中で、単に学問真理の追求だけでは時代の要請に大学が応えていくことはできず、広い支持も得られないということである。これからの大学は、広く一般社会との接点を探り、学問と社会との調和を図っていく主体的な役割を果たしていくことが求められてくる。我が国の大学は、米国に代表

されるプロフェッショナルスクールとは異なり専門的技術の養成機能を社会から期待されてこなかった。しかし、今日本で求められているのは、大学は「社会」の先端に存在すべき機関ということであり、社会の様々な諸課題に対し学問的見地からマクロ的な処方箋を提示していくことに躊躇すべきではない。

学問において広く社会に通ずるエッジのある思想を提供し、その思想が実際に社会に還元されていく役割を果たしていく存在、それが私の理想とする大学像である。「内なる国際化」に向けた基盤整備などの改革を実現し、内外の優れた思想を十分に相対化・咀嚼・昇華することのできる人材を不断に育成していく、それこそが筑波大学のさらなる飛躍につながるかと信じてやまない。

(こばやしたけふみ
生理心理学・行動薬理学専攻)